

被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
 幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
 被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット News Letter

第 37 号 2004 年 5 月 20 日(木) 発行 歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)



第 3 回 史料ネット講座シリーズ歴史遺産をかんがえる
 「兵庫津から神戸へ - ミナトと周辺の村々 -」の会場風景
 (2004 年 3 月 27 日開催 於: 生田文化会館)

目 次

巻頭言

総会を前に 辻川 敦・・・2

シリーズ歴史遺産をかんがえる 第 3 回
 「兵庫津から神戸へ - ミナトと周辺の村々 -」
 ~ 史料ネット講座、生田文化会館にて開催 ~

参加記 河野 未央・・・3

参加記 加藤 慶一郎・・・5

参加記 近藤 浩二・・・5

参加記 池上 理俊・・・6

特集

歴史まちづくりトークサロン~伊丹郷町にて~
 石川 道子・・・7

歴史まちづくりトークサロン 記録

辻川 敦・・・10

震災史料整理便り

関家文書の整理について 鎌谷 かおる・・・15

各研究会情報

「明和上知による尼崎藩の政策変化とその影響
 ~ 摂津国武庫郡上瓦林村岡本家を事例に ~」
 肥後 博・・・16

史料ネットからのお知らせ

宮城北部連続地震カンパにご協力いただいたみなさま
 ……18

2004 年史料ネット総会 ……19



総会を前に



歴史資料ネットワーク運営委員 辻川 敦

先日、伊丹において「歴史・まちづくりトークサロン」という、史料ネット主催の催しを持ちました。30人ほどの小さな集まりでしたが、伊丹や近隣地域において、歴史とまちづくりに関心を持ち実践しておられる皆さんによる、熱心な議論が交わされました。伊丹市の職員も数人参加、なかでも助役さんが来られて率直に発言しておられたので、これには正直驚きました。

内容についてくわしくは、本ニュースに掲載されている石川道子さんのレポートをお読み下さい。とにかく、伊丹でこの分野に関わるさまざまな立場・所属の人々が集まって、ひざをまじえて意見交換するというのははじめてのことだったようで、継続してこういう場を持って欲しいという要望が、幾人もの方から寄せられています。

今回のトークサロンは、市民講座の一つという位置付けで企画しました。なぜオーソドックスな講座形式にしなかったかということ、理由の半分は、より参加者主体・ディスカッション中心の双方向の催しにしたかったからです（正直言うと、理由のあと半分は、通例100人規模の市民講座を成功させるだけの余裕と自信がなかったからです）。

思いおせば市民講座やシンポジウムといった企画は、史料ネットが設立当初から行なっている目玉事業の一つです。その出発点にある史料ネットの基本的問題認識は、被災史料保全を通して感じた市民社会との間の認識のギャップ。それを埋めようと市民講座やシンポを開催。一方通行ではなく双方向を重視しようと、ディスカッションの時間を重視。壇上と会場では意見交換も限界があるということで、できるだけ懇親会を設定。さらに、地域団体との連携開催も追求。

こういった流れの延長線上に、今回のトークサロンのような形がある。思えばその試行錯誤のなかで10年です。こういう一つの方向性を10年もかけて、牛の歩みのごとく模索する。この愚直さが、史料ネットの活動を多少とも評価すべきものになっているのではないかと、これはまったくの個人的な感想ですが……

ところで、史料ネットはこの6月6日に総会を開きます。史料ネットも10年目の年を迎えるわけです。総会に引き続いて10年という節目をふまえ、この間の動向を検証するシンポジウムを予定していて、東京から保立道久先生もお招きしています。

前記の私の「愚直さ」評価は別にして、多方面のご意見をいただきながら史料ネットの10年を、いや違いました、9年をふり返りたいと思いますので、ぜひ多くの皆さんに、総会・シンポにご参加いただければと思います。

(つじかわ あつし、尼崎市立地域研究史料館)



兵庫津から神戸へ - ミナトと周辺の村々 -

～ 史料ネット講座、生田文化会館にて開催 ～

河野 未央

シリーズ歴史遺産をかんがえる第3回

「兵庫津から神戸へ - ミナトと周辺の村々」

日時：3月27日(土)午後1時から午後4時半まで

会場：生田文化会館

(神戸市中央区中山手通6 1 40 078・382・0861)

講師：桑田優氏(神戸国際大学教授)

「兵庫開港 近代神戸の始まり」

秋宗康子氏(KOKORO 和 KOBE)

「須磨の村々と兵庫津」

コーディネーター：大国正美氏(神戸深江生活文化史料館副館長)

コメンテーター：添田仁氏(神戸大学大学院文化科学研究科院生)

主催：歴史資料ネットワーク

後援：神戸市文書館・KOKORO 和 KOBE



平成16年3月27日、史料ネットは、講座「シリーズ歴史遺産をかんがえる第3回 兵庫津から神戸へ - ミナトと周辺の村々 -」を開催した。当日は受付が一時混雑するほど、多くの参加者が詰めかけた。

最初に桑田優氏の講演「兵庫開港 近代神戸の始まり」があった。桑田氏は、兵庫開港移住の居留地の問題を中心に、近世期東西海陸交通の重要な結節点であった「兵庫津」から近代日本の代表的港湾である「神戸港」への移住について述べられた。近世から近代にかけてミナトの機能の継承を考えるうえで居留地は欠かせない要素であるが、横浜や大阪などにくらべると神戸の居留地の研究はまだ少ない。その意味でも、桑田氏のこれまでの居留地研究をふまえた今回の講演は大変貴重なものであったと言えよう。

桑田氏はまた、数多くの写真や地図などをスライドで紹介されたが、当時の居留地の面影が偲ばれ、とても興味深い講演であった。

次に秋宗康子氏の講演「須磨の村々と兵庫津」があった。秋宗氏は、自身が積極的に活動を展開されているNPO団体「KOKORO 和 KOBE」での古文書学習会の様子を紹介されたあと、西須磨協議会所蔵文書・西代協議会所蔵文書・福祥寺文書など地域に残された史料の分析から、兵庫津と近隣農村の関係について述べられた。近隣農村と兵庫津との下肥汲み取りについての交渉のありようや、朝鮮通信使往来の際の役負担状況など、レジュメにあげられた史料をもとに具体的に描き出された。身近な地域の史料から身近な歴史を語られていたこともあって、会場の参加者も熱心に講演内容に耳を傾けて

いた。さらに当日の講演会場では座席後方に西須磨協議会文書が十数点展示されており、短い休憩時間の間には多くの参加者が展示史料の前に集まり、秋宗氏にその解説を乞うていた。参加者の、地元の歴史への関心の深さをあらためて認識した一幕であった。

続いて両氏の講演を受けて、添田仁氏



からのコメントがあった。最初に、秋宗氏の講演内容を受け、兵庫津と近隣農村との関係について述べられた。そのなかで添田氏は、秋宗氏が紹介された下肥取引のほか、海陸交通(特に宿駅制の問題)、市場、漁港、奉公人労働などさまざまなかたちで両者は密接に結びついており、相互依存の関係が認められることを指摘された。次に廻船の所有形態などから、近世の神戸村が通説で述べられてきたような「寒村」ではなく、流通拠点となりうる下地があったことを述べられた。これは桑田氏の講演における兵庫津 神戸といったミナトの機能の継承をより立体的にとらえるために、近世から近代にかけての神戸村独自の発展(兵庫津との「断続面」)にも目を向ける必要があるという添田氏の問題提起であった。刺激的な内容の論点が提示されたこともあって、続くディスカッションでは会場から多くの質問が寄せられた。

また、ディスカッションでは神戸市文

書館の斎木賢一氏から、『新修神戸市史』の編集事業等を含めた同文書館の紹介とともに、以下のような主旨のコメントがあった。神戸市文書館では史料ネットとの共同事業で阪神・淡路大震災の後に被災した史料の整理を行ってきた。(これらの事業内容については、ニュースレター33号掲載の添田仁氏の記事を参照のこと。)今回の講座において秋宗氏が講演に利用された西須磨協議会文書、西代協議会文書なども同文書館での事業の一環として整理が行われた文書群である。こうした事業成果を地域に還元したものであると位置付けられる。斎木氏は最後に、同文書館が神戸地域の歴史を探ることができる地域の文書群を所蔵しており、それらは市民の方々が気軽に閲覧等の利用ができるので、この講座を新たなきっかけとしてぜひ市民の方々にも同文書館に足を運んでいただきたいと締めくくられた。(神戸市文書館の所蔵史料等については、同文書館webページを参照してください。同webページは史料ネット講座でも斎木氏から告知がありましたが、4月17日にリニューアルされています。<http://www.city.kobe.jp/cityoffice/06/014/top.html>)

ディスカッションでは昨年度の近世講座『市民と深める阪神間の江戸時代史』(2002年11月10日開催、於園田学園女子大学)で行われたのと同様、震災後発足した各地の古文書を読む会の一年間の成果報告も予定していたが、時間的制約もあり、残念ながらそれらの報告はかなわなかった。ディスカッションの最後に、コーディネーターの大国正美氏が本日の講演を総括され、閉会となった。

(この みお、

神戸大学大学院文化科学研究科)

今回の催しについては、昨年より講読を始めた『歴史と神戸』で知った。私自身は神戸市域の研究はまだ無いが、だんだんと地元のことが気になってきていた。そんなこともあり、案内を見て即座に参加することに決めた。

県庁近くの会場に着くと、日ごろ博物館や研究会などでおつきあいのある方々の姿があった。聴衆として、あるいは裏方として幾人もおられた。誠に遅まきながらで恐縮だが、「ネットワーク」の広がりを知った。

一般の方も含め、参加者は多かった。会場うしろの補助椅子が無ければ窮屈だっただろう。そのまた後ろには、各歴史サークルの会誌即売コーナーが設けられていた。手元に置きたい物を手に取っていくと、一抱えほどになった。合計しても、申し訳ないぐらいの値段だった。

報告はいずれも個性的で面白く聞いた。桑田優氏「兵庫開港—近代神戸の始まり」は、液晶プロジェクターを活用されており、非常に分かりやすかった。講演の方法として参考になった。秋宗康子氏「須磨の村々と兵庫津」は、下屎流通を介した兵庫津と近隣農村の関係を論じられていた。あわせて、地域における NPO 活動

の現状についても言及されており、こうした情報も劣らず有益であった。添田仁氏「コメント 兵庫津をささえる近郊農村」も勘所を押さえた小気味よい論評であった。兵庫津と近郊農村の関係へと論点を広げ、講座全体の立体感を増した様に思う。「兵庫地図」をめぐる大国正美氏報告は、時間的余裕が余り無く残念であった。次の機会を楽しみに待つことにしたい。

実は、大国報告に先だち、神戸市文書館について、同館の斎木賢一氏から若干の説明があった。氏の口吻からは、その長さも手伝ってか、熱意が強く感じられた。率直に言って、このことは全く予想外であった。ただ私が鈍感なだけかもしれないが、今まで何度も文書館へ足を運んできたにもかかわらず、毛程も分からなかったからである。あるいは、単に色眼鏡で見て、自分勝手に決めつけていただけかもしれない。とにかく色々な面において、この会は私にとって意味があった。関係者の皆様には心よりお礼申し上げたい。

(かとうけいいちろう、

流通科学大学助教授)

神戸の桜開花宣言の翌日にあたる3月27日、神戸市中央区の生田文化会館において史料ネットの市民講座が開催されました。今回の講座は「シリーズ歴史遺産を考える」の第3回目の企画であり、

桑田優氏と秋宗康子氏の講演を聞く機会に恵まれました。参加者の方々はこの講座によって、いままで抱いていた江戸時代の神戸とは異なる、新たな神戸像をイメージとして構築できるようになったの

ではないでしょうか。私も経験したことです。が、小学校・中学校で郷土の歴史を教えられた際に強調されていたのは、近世の神戸村は寒村であったという点、何もない地域が開港によって突然発展を遂げたという点であります。神戸村や二ツ茶屋村自体には都市としての発展は無かったものの、都市をささえる周辺村として経済面・流通面において大きな役割を果たし、それが近代以降の神戸への素地を形成していたという今回の指摘は興味深いものであります。また、配付資料にあった『西撰大観』に描かれている神戸村からは、寒村とは異なる神戸村をビジュアル面からもとらえることができま

した。さらには兵庫津から神戸へという連続・継承面だけではなく、断絶面にも目を向ける必要があるという新しい論点の提示もあり、たいへん有意義な機会となりました。今回参加したことにより、いままでとは違った神戸が見えてきそうです。

当日の参加者数を目の当たりにして、地域の歴史や文化に強い興味を抱いている市民の多さを再認識できました。今後も研究成果の地域還元がこのようなかたちで頻繁に行われることが期待されます。

(こんどう こうじ、
尼崎市立地域研究史料館)

参加記 ～～ 史料ネット講座によせて ～～ 池 上 理 俊

平成 16 年 3 月 27 日の史料ネット講座で、秋宗先生の講演「須磨の村々と兵庫津」があり、須磨に古くから伝わる古文書の内容について、先生から詳しい説明をしていただきました。

秋宗先生は、地域活性化を目指した NPO 法人「KOKORO 和 K O B E」の活動の一環として、地域の古文書を初心者とともに読み進める活動を展開しております。そこで用いている古文書は、



西須磨協議会により伝えられてきたもの

で、現在は神戸市立文書館で保管されています。通常、このような古文書の取り扱いは様々な制限があって、簡単には使えないのですが、須磨区役所が間に立って一時保管する形で、地域の方々にご利用いただいています。

古文書の解読を進めていく意義は、その内容を知ることにより、地域の昔の姿、それも時には現在から想像もつかないような意外な姿が明らかになり、そのことが自らの住む地域への興味と愛着を起こさせることにあると思います。そして、そうした想いは、地域をもっと良くしていこう、という様々な動き（一般的にこうした動きを「まちづくり」と呼んでいます）につながっていきます。行政が地域の皆さんの活動を支援していく意義もここにあります。

須磨は、かつては須磨の関が置かれ、在原行平や（架空の人物ですが）光源氏が滞在し、源平の決戦の地となり、芭蕉

や蕪村が訪れるなど、歴史とはとても深い関わりのある土地です。従って区役所では、須磨のまちづくりを考えるにあたり、こうした歴史資源を活かすことが大切であると考えています。そこでその試みの一つとして、須磨の歴史に興味のある市民の方々に集まっていただき、「須磨歴史倶楽部」として、案内ガイドや情報発信の取り組みを進めようとしているところです。その活動拠点としている「すまいるプラザ大黒」は、区役所が小学校の跡地を地域交流拠点として暫定活用し

たもので、まちづくりにつながる活動をしている様々な市民が集まり活動・交流する場として、より一層の活用を図っているところです。

今後、「KOKORO和KOBÉ」との連携はもちろん、機会があれば、「歴史資料ネットワーク」や読者の皆様の様々な活動との連携を図りながら、須磨のまちづくりを進めてまいりたいと考えています。(いけがみ まさとし、
神戸市須磨区役所まちづくり推進部)

特集

歴史まちづくりトークサロン～伊丹郷町にて～

石川道子

1 トークサロンの開催

歴史資料ネットワークの主催で開かれた今回の講座は、従来の、主に主催側の話と受講者という形式を変え、参加者全員が議論に加わるというかたちをとることになった。およそ3時間の講座のため人数を30人にしぼり、開催場所は伊丹市。国の重要文化財に指定(平成4年)されている延宝2年(1674)建設の旧岡田家住宅・酒蔵に隣接して移築された町家石橋家住宅を会場に、雰囲気づくりをはかったのは史料ネットの辻川さんである。

役割分担として、伊丹に住んでいる私のほうは参加者を募ることになった。募集期間もあり、おのずから範囲が限られてくるのは否めない。このようななかでもっとも留意したのは、立場の異なるいろいろなグループから参加していただくことである。歴史・まちづくりにかかわる市民グループ・行政・企業・市民代表



として市会議員、と考え、さらに言葉だけではない人、である。適任者に出席していただけたと思っている。以下に出席して下さった方々の所属等を記す(順不同)。

村上敦子(アース伊丹)・阪上聡樹(伊丹市市民まちづくり課)・泊照彦(市会議員)・松野久美子(市会議員)・前田昌彦(有岡小学校)・寺田勝重(荒牧夢の町応援団)・前田喜治(北河原自治会)・岸本寛(丹悠会)・森本啓一(荒木村重

研究会)・小寺正之介(西宮市宮水学園)・馬場正哲(地域計画建築研究所)・藤原保章(伊丹市助役)・小長谷正治(伊丹市教委)・八ヶ代伸行(神戸市立宮川小学校)・木挽司(市議員)・加藤宏文(歴史資料ネットワーク)・豊田正義(郷町ボランティアガイド)・荒木村重研究会)・田中邦夫(まちづくり基本条例を育てる市民の会)・相馬房雄(宮の前自治会)・まちづくり基本条例を育てる市民の会)・中塚一・横山奨・上町範兼
スタッフ=坂江渉(神大文学部地域連携センター)・松下正和(歴史資料ネットワーク)・辻川敦(史料ネット)・石川道子(地域連携センター)

以上の方々による討議のなかから、わかっているようで漠然とした「歴史・まちづくり」とは何であるかを幾分でも抽出し、それぞれの立場で独自にかかわっている現在の活動を今後どのように発展させるべきかを考える場となればと思う。

2 夢の町応援団

午後2時開会。司会石川。まず、坂江氏から開催趣旨と神大文学部地域連携センターで行っている尼崎富松地域の連携事業等についての説明があり、つぎに辻川氏が資料として出された、産経新聞連載「神戸阪神時空散歩」により、ご自分が取材のために歩かれた伊丹の歴史スポットおよびまちづくりへの取り組みを紹介されたあと、参加者からまちの現状や現在のご自分たちの活動状況、課題等のコメントをいただいた。本来なら、この場で討議された内容すべてを記録しておきたいのだが、紙面の制約上、ここでは「夢のまち応援団」にスポットをあてて紹介する。まず、夢のまち応援団々長の寺田氏のコメントの概略を記す。

寺田：「夢のまち応援団」は、阪神・淡路大震災により被災した伊丹市荒牧のな

かに復興道路が通ることになり、それを契機として生まれたまちづくりグループである。道路をつくるにあたり周辺デザイン等について提案をし、さらに住民でのポケットパークづくりが持ち上がった。急遽、公園の視察や勉強会、また行政と相談を重ね、地場産業である造園業を活かした公園づくりが実現し、この活動が「夢のまち応援団」の結成に結実した。地域のなかにポケットパークを順次造って行きたいと、まちづくりグループとして県の助成事業に応募したとき、認定されると同時に、同じく桜並木復活を目指して応募していた宝塚市雲雀丘山手緑化推進協議会の活動を、夢のまち応援団が造園業でもって協力することとなり、昨年12月に最初の植樹を行い、今年も続行する予定である。

今年、震災で倒壊した天日神社鳥居の修復を計画。棟札により、ちょうど300年前にこの鳥居の修復が行われたことがわかり、今年、是非この鳥居を直し、三



百年祭を実現したいと、自治会やお宮の関係者に働きかけ、資金の調達もできそうな見通しである。現在団員26名(内、女性7名)、荒牧にいろいろな想いをふくらませ、地域、行政、夢のまち応援団の母体である「丹悠会」等と連携しながら、まちづくりに取り組んで行きたいと思っている。

なお、寺田氏の話のなかに出てきた「丹悠会」について、同会の生みの親でもある岸本氏からコメントをいただいた。

岸本：震災前後、都市景観の仕事をしていて、景観形成指定家屋の所有者のネットワークづくりを考えていたが、回りからは、やめたほうがよい、できないといわれた。どうしてもやりたいと思案しているとき震災に遭った。市域に26軒あった指定家屋のうち13軒が倒壊、残った家も多くは痛みが甚大で、修復に際して業者にだまされないためのネットワークとして「丹悠会」を創った。その後はまちづくりの団体として、家屋の所有者と賛助会員で活動している。会員は市内の旧村を単位程度に散在しており、まちづく



りで先進的な他市の視察等のかたわら家屋の一般公開等も行っている。助成金ゼロの任意団体で、市から独立しつつ市に協力するというスタンスで活動している。荒牧の「夢の町応援団」と北村の「多田街道の景観をつくる会」は、丹悠会を母体とした各地域のまちづくり団体という位置付けになり、相互に協力して活動している。このようなグループが各地域にでき、意志の疎通を図りながらまちづくりができればよいと考えている。荒牧では若い世代が中心となって活動しているのが心強い。植木のまちとして荒牧全体

をショールーム化して行けばと思っている。

以上が「夢のまち応援団」の結成・活動とその周縁である。「丹悠会」とともに活動の方向性がはっきり出ており、さらに常々感じている活動資金ということについての示唆が含まれていると思う。それぞれのグループが主体性を持つてことに当たりたいと思うが、ネックとなるのはやはり活動資金である場合が多く、市民グループとして自立するには資金的な裏付けは大きな課題である。夢の町応援団の持っている造園技術をもつてのまちづくり活動はすでにその点をクリアしているのではないかと、多少羨ましくもあった。

3 伊丹での取り組みと課題

夢のまち応援団のほかに今回話題に上った項目を順不同で紹介しておく。

有岡城址、郷町、郷町館（旧岡田家住宅・石橋家）、伊丹市域のボランティアガイドの養成および活動について。

御願塚地域の歴史的景観とその保存活動。

平成15年4月に発足した伊丹市市民まちづくり課の方向性。

平成15年10月から施行された、協働と参画のまちづくりを目指す「伊丹市まちづくり基本条例」と、「役所からお仕着せの協働・参画」ではない本当の協働・参画とは。

史跡「きしの砦」（猪名野神社境内）の保存。

市内外に伊丹を知ってもらうための、歴史と文化のまち「伊丹アピールプラン」。

小学三年生の「まちの先生」（地域の年配者）制度、および遊び場について。

西宮市のさくらFMと「語り部コーナー」。

尼崎市園田地区の歴史・農業・自然をテーマにしたまちづくりグループの課題。まちづくりの全体構想の必要性。

伊丹市北河原のまちづくりグループ立ち上げの糸口の模索。

世代間、地域間、市民・行政・研究者・企業間の結び付きと働き手世代の参加。

以上のような数々の事案について、取り組みや課題が話題にのぼった。短い時間で議論を深るまでに至らなかった点が残念だが、互いに知り合い、連携し、ネットワークを広げて行きたいという共通項が出て来、第1回目の催しの成果は十分出せたのではないかと思われる。さらに今後どうして行くかという次のステップの場を、今回のトークサロンの記憶が薄れないうちに持ちたいものである。

4 閉会后

打ち合わせなしでぶっつけ本番のトーク。どのような展開になるのか心配した

が、しっかりとご自分のビジョンをもって活動しておられる方々が集まっておられ、その点は全く杞憂に終わった。

閉会后、今後もこのような企画を継続してほしい、あるいは継続したいというご意見を多数いただいた。今回、個々の議題が出たが、まず、自分たちのまちをどのようなまちにしたいのか、そのなかで一つ一つの点を線に延ばし、面とし、さらに立体的に構築して行くかたちでのまちづくりを話し合う場が是非必要であろう。

今回は伊丹市で開催したが、各市、各地域でこのような場を持つことはでき、この場を活用して、市民、行政、企業、資料ネット、連携センター等がそれぞれの役割で能動的に活動したとき、自分たちのまちづくりができるであろうと感じた密度の高いトークサロンだった。

(いしかわ みちこ)

歴史まちづくりトークサロン 記録

辻川 敦

2004年4月24日
歴史資料ネットワーク主催
「歴史まちづくりトークサロン 伊丹郷町にて」
於 伊丹郷町館石橋家住宅

午後2時開会 司会 石川道子
会の趣旨説明、史料ネットの紹介(辻川敦)
共催団体、神戸大学文学部地域連携センターの紹介(坂江渉)

辻川 敦：配布資料(産経新聞連載 神戸阪神時空散歩より伊丹分)もとに、伊

丹の歴史スポットとまちづくりの取り組みなどについて紹介

各団体などからのコメント

小長谷正治さん(伊丹市教委)：伊丹郷町発掘、町家保存、文化財ボランティアの養成と活動などについて紹介。

寺田勝重さん(荒牧夢のまち応援団)：荒牧は阪神・淡路大震災で被災し、復興道路(5m道路)を通す区画整理の指定を受けた。そのなかで、ポケットパークを住民主導で造ることになり、みなで他所の公園を見学したり、役所と相談したりするなか、荒牧の特徴である造園業、池

やだんじりといったものを生かす公園づくりを考えた。池は無理だが、だんじりのイメージのあずま家や、提灯のような車止めなどが実現した。その分工事費は高かったが、市役所の理解を得て資金を用意してもらった。

この活動が、夢のまち応援団となった。

他所を視察するなかで、どこでも歴史を背景にまちづくりに取り組んでいると感じた。

現在、震災で倒壊した天日神社の鳥居を直して、300年祭を開催したいと計画している。古文書から、300年以上前から神社があり、300年前に鳥居が建てられたことがわかったので。宮総代さんにも働きかけて、ようやく重い腰をあげてもらって、資金も出してくれそうな話になっている。

地域のなかに、ポケットパークのような場所がもっとあればよいと思って、スポットを造っていこうと県の助成事業にも応募した。同じ事業に応募した宝塚の雲雀丘のグループが、桜並木復活をめざしていて、それに荒牧(の造園業)が協力することになった。

今後もこういった方向で取り組んでい



きたい。

豊田正義さん(ボランティアガイド、荒木村重研究会): 瓦田昇先生の長年の村重研究を受けついで、荒木村重研究会が活

動している。

また自分自身は伊丹の歴史案内ボランティアとして活動している。産経記事にも紹介していただいたが、その記事を見て伊丹にやってこられて、ガイドを依頼する人も少なくない。

ガイドをはじめたのきっかけは、8年前会社勤めをリタイアし、有料の伊丹ツアーでよそから来た先生の案内に多くの間違いがあったので、博物館などで勉強してボランティア講座も受講し、ガイドとして有岡城祉と郷町で案内するようになった。数年間で、三百数十回案内している。質問の多い項目があると、またそれを勉強して資料を作ったりしている。

田中邦夫さん(まちづくり基本条例を育てる会): 育てる会とは、参加と協働のまちづくりを進める団体。もともと、まちづくり基本条例を作るに際して、市が委員を公募し、集まった市民が提言して条例ができた。それで、作る会は解散したが、提言して終わりではなく活動を続けようと、育てる会を作った。まちづくりに対して、市民参画をどう進めるのか、そのシステムは行政のなかでどうなっているのか、といった点を検証していく。

昨今のまちづくりや協働のあり方については、「役所からお仕着せの協働、市民参画、NGO」という批判的な見方もある。

育てる会では、去年1年間、行政への提案をパンフレットにまとめ(トークサロンにて配付)、現在はまちづくりフォーラムを準備している。立場の違いを理解しながら、一致点を見出すという方向で考えている。

今、本当に求められているまちづくり、協働のあり方とは、市民の側から行政を巻き込んでいく形であり、そのなかから本当の市民自治が育つ。

本当のまちづくりのためには、市民のなかにまちづくりを自身で考える人が必要。そういう人をどう作っていくのが重要。つまりまちづくりは人づくりと考えて、取り組んでいる。

阪上聡樹さん（市民まちづくり課課長）：本日は、この場に本市の藤原保章助役も参加している。

市民まちづくり課は昨年4月に発足した。従来のコミュニティ活動を、もっと幅を広げるという方向性のもと作られた。むずかしい話ではなくて、まちづくりに向けた市民の皆さんの出会いの場、きっかけづくりが大切と考えている。ここに集まった皆さんにも、歴史や人、まちとの出会いがあって、こういったテーマに関心を持つようになり活動しておられるのではないかと？

つまり、ちょっとしたきっかけでまちづくりに参加してもらえるのでは。そのなかから、さまざまな視点が生まれるのでは。

阪急伊丹駅のなかにハートフルプラザがあったが、3月で閉鎖となり、こんどは市民まちづくりプラザに衣替えすべく、世話役を公募中である。ハード面の整備からソフト面へという転換。7月1日のオープンをめざしている。ここを出会いときっかけの場所、もっと輪を広げる新たな出会いの場にしたい。

出合いを演出するのはむずかしい。まちづくりラウンドテーブルというのをやっている。市民の皆さんに、今日のこういう風な場を作ってもらう、そういう方向で進めていこうとしている。

（休憩）

フリーディスカッション（司会、石川道子、辻川 敦）

石川道子さん：20年ほど前に引っ越してきて、さまざまなことに関わってきた。

そのなかで、まちづくり基本条例づくりの経験について。これまではこういったことは、役所が選ぶ団体代表が決めていたと思う。今回の条例を作る会は、市が団体代表とともに公募委員を募り、最初は合計30人の委員であったが、作業を進めるなかだんだん委員が減って、最後は団体ではなく個人の立場の委員ばかりが残った。

それから、最近の取り組み経験として、3月に隣の岡田家住宅でひな祭り展を開催した。予算もなにもないところから、多くの市民の皆さんや、行政職員の皆さんの協力で、ごくわずかな経費で実現した。こういう取り組みの形が可能だし、まちづくりにおいても今後の方向性として有効だと思う。

森本啓一さん：坂江さんの話のなかで、尼崎の富松城跡の取り組みを支援していることが出たが、同じような史跡として、伊丹の「きしの砦」跡が気になっている。皆その文化財としての意味合いを知らず、乗り越えたりしていたのでくずれかかっている。本格的な調査や整備ができない



ものか、そういったことについて神戸大学や史料ネットの支援は得られないか？

小長谷正治さん：「きしの砦」跡は猪名野神社境内にあり、一部土塁や堀跡が残っている。2～3m程の高さの場所もあるが、だいたい1m程度の高さで土塁跡が

残っている。(面的に?)文化財に指定されている(どういう位置付け、範囲?)。
相馬房雄さん：子どもの頃、「きしの砦」のある、あのあたりで遊んでいた。だから崩していたことになる。それが土塁跡ということは知らなかった。市民が知らないから、行政も保存等のために、腰をあげられないのではないかと。勉強して、みなが知っていくことから始めてはどうか。

藤原保章さん：わたしもあそこで遊んでいたくち。あとで土塁跡と知った。

20世紀後半以降の都市開発の時代、伊丹が開発され発展してきたわけだが、その流れのなかで、今は歴史の転換点であり、立ち止まって考えてみようという時期であると思う。

20世紀は国が方針を決めてやってきたが、これからは逆で、国から地方へ、市役所から市民へという時代。まちづくりのあり方も変わっていく。伊丹市としては、歴史と文化を活かしたまちづくりをやっていこうという考え。市民の皆さんに、そして市外に対して、伊丹のよさを知ってもらおう「アピールプラン」を...



松野久美子さん：いきなり歴史の話ではなくて、まず伊丹市をどういう市にするか、そのなかで歴史をどうするかが大切。そして、点だけでなく、線、面という形でまちづくりを。条例も立派なものがで

きたが、どう活かしていくかだ。

豊田正義さん：歴史とまちづくりという観点から、午前中、アースディ伊丹の御願塚探訪を案内した。事前準備として3~4回御願塚を訪問し、地元旧家の笹さんなんか尋ねて勉強した。御願塚は伊丹のなかで一番歴史が残されているエリアだと思う。

勉強するうちに、御願塚古墳やまちなみといった、歴史を残すために努力がなされてきていることがわかった。たとえば文化財愛護少年団があり、月1回古墳の清掃活動をしている。景観形成建築も4~5軒ある。個人の方が行基菩薩像を所有地内に建立し、さらに農具等の私設資料館を開設されている。

もっと伊丹市民に対して御願塚をPRして、他の地域でもそれにならって取り組んだらどうか。地域によって、この分野の活動のアンバランスがある。

前田昌彦さん：有岡小学校の教師を務めている。3年生のカリキュラムで「まち探検」というのがあるが、3年生では少し無理な部分もある。

「まちの先生」という制度があり、地域の年輩の方に来ていただいて、七夕会とか昔の話を聞く会なんかをやっている。もっと来てもらって、教えてもらえるとよいと思う。たとえば戦争中のことなんかも、体験者にリアルに語ってもらったほうがわかりやすい。

地域のなかには、お年寄りが多くおられる。もっと多くのお年寄りを知り合いにならなければ、人脈を作らなければと感じている。

まちづくりという点では、子ども達にとって重要な問題は遊び場所だ。いまのまちには遊び場所がないから、習い事(例えばスイミングスクール)に行く。まちづくりは、大人の視点でなされていると

思う。

あと、子ども達がお年寄りと接する機会を作ることが重要。

馬場正哲さん：西宮在住で、尼崎の園田のまちづくりに参加している。自然と文化の森協会が作られ、歴史・農業・自然といったテーマで取り組んでいる。昨年、猪名寺廃寺フォーラムを開催した。調べていくと、伊丹との関係、舟運で結ばれていたことなどもわかった。また、伊丹と尼崎の境界上にある東洋リノリュームの工場敷地内に、黄金塚がある。建築家・武田五一が設計した建物もある。リノリュームというのは、自然素材の製品として見直されているものであり、それを製造していた工場という意味も含めて、近代遺産であるとも言える。

園田の取り組みも、伊丹との関わりなしには活動ができないと感じている。

伊丹の皆さんに怒られそうだが、園田では「猪名の里」というキャッチフレーズを作った。秀吉時代以来という田能特産の里芋を、市民の皆さんに参加してもらって栽培し、収穫祭をやっている。支援する農家の側が真剣なので、適当な気持ちで関わる市民の側の参加者に対して厳しいことを言われることもあり、しかしそういったことも大切なのかなと感じている。

さまざまな団体やメンバーの連携の方法も考える必要がある。園田でもいろいろな活動があり、結構仲が悪かったりする。お互いの活動を相互に知り合うことから始めていくことだ。

小寺正之介さん：西宮から来た。西宮では自然保護などの分野の活動に力が入られていて、歴史の分野は伊丹ほど活発ではない。そんななか宮水学園という60歳以上の高齢者の生涯学習の場があり、2000年にさくらFMというローカルFM

局から相談があって、語り部コーナーの番組をはじめた。記録集も作っている。

1年分で280pになる。

泊照彦さん：北河原で活動している。市会議員。北河原も歴史のある地域で、昔は駄六川に樽を積み込む船着き場があった。地域の皆さんの考えにもとづいたまちづくりができないかと、前田喜治さん（地元自治会）とともに駄六川の親水性をテーマとしたまちづくりを考え中。夢追い探検隊という懇談会形式のまちづくりを進めたい。会員も募集中。

立ち上げに時間もかかると思うが、ま



ずは駄六川の源流探しなんかからはじめて、先進地の視察や、荒牧との交流なども進めていきたい。

岸本寛さん：(石川さんが紹介、荒牧夢のまち応援団や丹悠会の生みの親)

水道局に勤務。震災の頃は、都市景観の仕事をしていた。震災前に、景観形成家屋所有者のネットワークづくりを考えていた。懇談会はやめた方がいいという話も聞いたし、素人にはできないとも言われた。

震災により、26軒あった指定家屋が13軒になった。公費解体により、まだもつ家もつぶされた例もあった。震災でいたんだ家屋を修理するのに、業者にだまされぬためのネットワークづくりとして丹悠会を作った。荒牧、多田街道なんかと

も一緒に取り組み。尼崎市でも丹悠会と同じような会が発足し、ノウハウを知りたいと尋ねてこられた。

丹悠会では、先進地視察や、家屋の一般公開などの活動。助成金ゼロの任意団体であり、市から独立しつつ市に協力するというスタンス。会長は、歴史や都市環境といった次世代に残すべきものを残すことが使命と言っておられる。

荒牧では若い世代が頑張っていて活動しているのがよい。植木のまちとして、荒牧全体をショールーム化していけばと思う。**松下正和さん**：史料ネットでは、今年度（平成15年度）3回市民講座を開催してきたが、こういった議論の場がなかなかなかったので、こういう企画を開催した。

今日の話で感じたのは、まずまちの方々の記憶が大切。また、私たち研究者の側のまちへのまなざしと、市民の皆さんのまなざしとがずれるところもあると思うが、それをつなぎ合わせることができればと思う。また高齢者と若い世代など、世代間のつなぎ。働き手の世代にどう関わってもらうか、また地域間の結びつきをどう作るかなどの課題もある。

神戸大学の地域連携や、史料ネットが、それらを結ぶ役割を果たせればと思う。

辻川敦：今日はさまざまな取り組みや、課題が話題に出た。第1回目の場として、これらを相互に出し合い、知り合うことができた。皆さんの意見のなかで、相互に知り合い、連携し、ネットワークを広げていくことが大切という共通項が出てきたと思うが、今日の催しはその一歩という意味合いはあったと思う。

ただ、ここで出たような課題などに対して、今後どうしていくのか、というステップの意見交換が次に必要になってくると思う。まちづくり基本条例を育てる

会の田中さんから問題提起のあった、「お仕着せの協働」という指摘などのように、議論を深められない論点もあった。

今日の議論にひとつ付け加えておけば、岸本さんから荒牧のショールーム化の話が出たように、経済的な活性化の方向がある。尼崎では、これまで歴史・まちづくりと言うと市民・市民団体と専門家・大学、行政といったセットの取り組みであったが、最近は工業会や商工会議所、商店街、TMOといった経済界との連携が自然と生まれている。経済界の皆さんも、現在の厳しい経済状況のなか地域の経済的活性化をめざすには、まちづくりの視点に立ったベーシックなまちの活性化が必要という認識になってきているのではないか。そういう方向が、さらにネットワークの広がりになっていくと思う。

石川道子さん：公の場の議論では、往々にしてきれいごとだけで、解決していないことが解決したかのように議論がまとめられて終わったりする。うわべの部分の議論しかできない。今日は、初対面の人も多く、いきなり本音にはなりにくいと思うが、これから回を重ねて行けば、よいまちづくりのテーブルになるのではないか。行政だけでも、市民だけでも、議員だけでも、まちづくりはできない。こういう幅広い集まりが必要。

（以上）

（つじかわ あつし、

尼崎市立地域研究史料館）



震災史料整理便り

関家文書の整理について 鎌谷 かおる

神戸女子大学では、阪神淡路大震災の際に救出されて神戸大学に保管されている史料のうち「関家文書」を預かり、学生有志により史料整理に着手している。今回は、その内容の一部を紹介する。

「関家文書」救出の経緯については、『歴史資料ネットワーク活動報告書』(2003年)の中で奥村弘氏が紹介されている。それによれば、神戸市東灘区住吉東町の倒壊した関氏の住宅から1995年5月2日に救出し、受け入れ・搬出を行っていることはわかっているが、詳細については記録が残っていないため不明である。しかしながら、所蔵者である関志満子氏については、1995年8月3日神戸市文書館により聞き取り調査がなされており、幼い頃の思い出や結婚して以降の話も記録として残されている。

まず、「関家文書」の概要について述べておきたい。史料は、合計八箱の段ボール箱に収められており、今回はそのうち四箱の整理作業を行った。大半は書籍であり、とくに写真に関する雑誌および美術系の書籍や絵はがき等が多くあり、どうやら関氏(志満子氏のご主人)の趣味は写真であったらしいことがわかる。また、1950年代の映画や演劇のパンフレット類が多数残されている。

趣味で集められた書籍の他に注目できるものとして、「反高家庭会」関係の史料がある。聞き取り調査の記録によれば、関志満子氏は戦後に、「婦人会なんて考え方は止めて、男も女も区別なく、家庭ぐるみの会を作りましょう」という発言をして、総スカンをくらったというエピソードを話されて

いる。また、反高林地区において、独自に家庭ぐるみで「反高家庭会」を結成し、子供の学習会をおこなったという話もされている。今回、文書調査の過程で発見した「反高家庭会」関係史料は、まさにその時の関係書類である。様々な案内の回覧板や、家庭会での集まりの際の参加者名簿など興味深い史料が残されていることがわかった。残りの箱にもまだ関係書類が存在する可能性があり、これらの史料群を分析することにより、「反高家庭会」のような、戦前の隣保制度に代わる民主的な組織を作ろうとする住民自治的な活動が、終戦後にいち早く開始された経緯などを、具体的に解明することが可能であると考えられる。

さて、今回「関家文書」の整理を行った学部学生は、史料整理をはじめて体験したという人が大半であった。史料救出以後、一度も開けられることの無かった段ボール箱から本を取り出した時、あまりの埃の多さに最初はとまどっていたようであるが、とりわけ個人の蔵書という性格が強い史料群であったことから、作業の過程では、誰かの本棚をのぞいてみるような楽しさがあったようにも見えた。書籍の内容を見ながら、決して出会うことの無い関氏について、どのような人物であったのか...など、話をしながら作業をすることもしばしばあった。

残り四つの段ボール箱の史料についても引き続き整理作業をおこない、その内容については別稿で報告したい。

(かまたに かおる、

神戸女子大学大学院学生)

西 撰 研 究 会

明和上知による尼崎藩の政策変化とその影響

～ 摂津国武庫郡上瓦林村岡本家を事例に～

肥 後 博

西撰研究会は4月17日(土)午前10時から、尼崎市立地域研究史料館において行われました。今回は報告者の肥後さんに当日の報告要旨・議論等についてまとめていただきました。

明和6(1769)年、長崎奉行石谷清昌の進言によって行われた尼崎藩の一部(西宮・兵庫津などの灘目一帯)公収は、一般に明和上知と呼ばれている。この明和上知については幕府政策の転換と尼崎藩の財政的な打撃として評価されてきた。しかし、明和上知が行われた宝暦天明期という時期が、これまでの研究が示すように大きな転換期であったことを考慮すると、幕府政策としての大きな転換だけでなく、尼崎藩にとっても転換となったのではないかと捉える必要がある。

そこで本報告では、西撰地域を代表する富農である摂津国武庫郡上瓦林村岡本家の経営分析を通して、明和上知によって尼崎藩の政策がどのように変化し、そしてその変化が岡本家の経営へどのような影響をもたらしたのかを分析し、財政的な打撃ではなく政策変化という視点から明和上知を再評価することを目的とした。具体的には、尼崎藩の政策として御用銀賦課と郷払制度の変化について分析を行い、それによって岡本家の経営がどのように変化したのかを明らかにしている。御用銀賦課では、明和上知以後、在方への賦課が行われるようになっており、それに伴い岡本家へも賦課さ

れるようになっている。また、郷払制度では郷払の中心が西宮から尼崎に変化することによって、岡本家自身の郷払量は減少しており、郷払制度を利用して米の販売を行っていた岡本家にとって、それは米販売を困難にする原因となったのではないかと考えられる。そして、天明4年より岡本家は今津へ酒造業進出しているが、そのことは御用銀賦課や郷払制度の変化による困難な状況を打開するための手段であったのではないかと考える。岡本家の酒造経営は他からの借銀によって資本を賄っていたため、経営は決して有利なものではなかったが、岡本家自身の郷払米を使用して酒造を行っていることから、米の新たな供給先としては有利に働いていたことが伺える。しかし、わずか4年で酒造業から撤退しており、撤退の理由については現段階では不明である。

以上が本報告での要旨であるが、報告についての質疑・討論では多くの課題が明らかとなった。御用銀賦課の比較対象としている享保10(1785)年と天明元(1781)年では、そもそも御用銀の名目が違うのではないかと、郷払制度を利用して販売する米以外の余剰米はどのようにして販売しているのかなど分析不足な部分が指摘された。また、岡本家がどのような家なのか公私の部分を含めて検討する必要性や西宮や兵庫津などの維持費を考慮すると、明和上知が尼崎藩にとって有利に働いたという視点を持つ必要があるのではないかと指摘も受けた。今後

は、これらの課題に加えて、酒造業撤退の理由や明和上知以後の幕府と尼崎藩の関係なども考察しながら、尼崎藩にとっての明和上知の持つ意味、さらには畿内・近国における個別領主権力の役割や農業経営にお

ける領主権力の意味というものも明らかにしていきたいと考える。

(ひご ひろし、

学校法人清風南海学園講師)

史料ネットからのお知らせ

宮城県北部連続地震カンパにご協力いただいたみなさま

2003年7月に発生しました宮城県北部連続地震に際し、多くの方々から史料ネット宛にカンパをいただきました。2004年5月18日段階で、合計307,639円集まりました。既に全額を宮城資料ネットに送金しております。ご協力いただきました皆様方に、この場を借りまして厚くお礼申し上げます。

青柳周一様、井ヶ田良治様、伊藤昭弘様・彰子様、大岡聡様、大国正美様、大槻英子様、柏木朱実様、喜多功様、北泊謙太郎様、小林准士様、佐藤修二様、篠宮雄二様、芝村篤樹様、白石健二様、鈴木良様、田島昇様、館春江様、立花京子様、塚田孝様、辻川敦様、長山雅一様、中村由美子様、馬場義弘様、林基様、早川朝子様、古川明様、法政大学史学会様、松本純子様、森田幸宏様、柚山俊夫様、吉田晶様、渡辺尚志様、匿名希望様(1名)(五十音順)

また、カンパ集めにご協力頂きました日本史研究会の皆様、史料ネットの市民講座の参加者の皆様にもお礼申し上げます。ありがとうございました。

2004 年度歴史資料ネットワーク総会

日時：2004年6月6日(日)13:00~14:30

会場：尼崎市小田公民館学習室2・3

(尼崎市潮江1-11-1-101、06-6495-3181、

JR 尼崎駅北東徒歩5分)



シンポジウム

現代社会における歴史学、史料・文化財保存
- 震災から10年、史料ネットの活動をめぐって -

(上記総会終了後) 14:40~17:00



奥村 弘 氏 (歴史資料ネットワーク代表委員)

震災後10年間に新たに展開してきた状況や

課題について」

辻川 敦 氏 (尼崎市立地域研究史料館)

「この間の行政の動向について」

コメント 保立 道久 氏 (東京大学史料編纂所)

総会は史料ネット会員のみ参加となっております。

シンポジウムはどなたでも参加可能です。

シンポジウム参加 申し込み方法：住所 氏名 年齢 電話番号を明記の上、メール FAX /V/F 電話のいずれかの方法で下記「史料ネット」まで申し込み下さい。

定員50名 参加費は無料(会場費・資料代1000円必要)



編集後記

今回は史料ネットの近世史講座と伊丹トークサロンを中心にお届けします。ご確認ください。

巻頭言にもありますように、阪神・淡路大震災から10年、史料ネットも9年目を迎えます。6月6日の総会の際に開かれるシンポジウムでは史料ネットの活動をはじめ、この10年間の動向をふりかえって議論を進める予定です。今後の史料ネットの方向性を探るためにも、会員・サポーターの皆様にご参加いただき、忌憚りなく意見を述べていただければと思います。よろしくお願いいたします。(こ)

個人会員への入会と“News Letter”購読のお願い！

史料ネットの活動に平素からご協力いただき、ありがとうございます。

歴史資料ネットワークは、改組後も引き続き“News Letter”を年4回発行いたします（年間購読料：郵送料込み1000円）。改組とともに今後内容を更に充実させる努力を重ねて参ります。皆様方には引き続きご購読いただきますよう、よろしくお願い致します。

また、表題にもありますように、ニュースレター会員・贈呈読者の皆様には是非とも個人会員へのご入会（年会費：個人会員5000円、学生・院生会員は半額）ないしサポーター（一口3000円以上）としてご支援いただき、史料ネットの発展にご理解・ご協力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

史料ネット 郵便振替口座

名義：歴史資料ネットワーク

口座番号：00930-1-53945

史料保存関係のホームページ“Archivist in Japan”を開設している小林年春さんのご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに連載していただいています。<http://www.archivists.com/> または <http://member.nifty.ne.jp/archivists.com/> または <http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/>

史料ネット NEWS LETTER No.37 発行 2004年5月20日

編集 発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部地域連携センター気付 史料ネット神戸センター

TEL&FAX:078-803-5565 (開室時間 平日の午後1時～5時)

URL:<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/> macchan/ e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp